

史料紹介 (Introduction to Historical Material)

組踊「智取敵打」じのじゆ

(Concening the Kumiodori (Okinawan traditional Dance-Drama) of the Mukotori Tekiuchi)

當間 一郎

(沖縄県立博物館)

Ichiro TOMA

(Okinawa Prefectural Museum)

この組踊は、田代安定扣稿本組踊集一冊の一つ『沖縄小説集』に収められた一番で、他に「探義傳敵打」「大浦敵打」がはいっている。なお、もう一冊は『沖縄組踊集 即チ沖縄歴史小説集』といふ、「孝女布晒」「貞孝婦人」「孝行の巻」「森川の子」「女物狂」の五番が収録されている。

「田代安定扣稿」の「扣稿 (ハハハハ)」とは、「控えの稿」「写しの原稿」「副本」という意味で、田代安定が、古い組踊写本から書き写したものである。『沖縄組踊集 即チ沖縄歴史小説集』のとびらに「田代安定扣書 寫シ 組踊集」と記されてるので、田代安定が沖縄調査の際に、或る元本から書き写した『組踊集』一冊であることはまちがいない。

この扣稿本は、一冊になっているが、元本がこの通りであつたのか、あるいは一冊であつたかは現在のところ判然としない。ただ、この扣稿本一冊のめやらしいとは、他

の組踊写本が、敵討 (打) 物と世話物、崩れ物が分類されずに取りまぜて書きつづられているのに対して、田代扣稿本は、敵討 (打) 物を『沖縄小説集』として一冊にまとめ、世話物を『沖縄組踊集 即チ沖縄歴史小説集』として収録していくことである。もともと、これら二冊の八番 (敵討物三番、世話物五番) が一冊になつていたのを、書き写す際に内容によって分類したのか、興味深い。

田代安定 (一八五七～一九二八) は、鹿児島市加治屋町に士族の子として生まれ、同地の私塾「柴田塾」で、フランス語や博物学を学んだ。そして一八七四年に上京し、内務省御雇・博物館掛となつたが、母の死で鹿児島へもどり、県勧業課陸産係になつた。田代は、国の農商務省から派遣されて、沖縄へ一八八二年、一八八五年、一八八七年の三回来島した。主なる用務は、マラリア撲滅のための規那樹 (キニーネを取る) の試植であった。その間、沖縄本島で

の調査、宮古・八重山での人種、民俗調査をやり、貴重な史料(資)料を書写し、収集している。それらを紹介すると、第一回目の報告書として、『沖縄県下先島廻覧意見書』があり、第二回目は、八重山に十ヶ月間滞在した関係で、『八重山群島急務意見書』『八重山群島物産繁殖ノ目途』、第三回目は、『八重山住民ノ言葉及び宗教』を報告している。他に、『沖縄今帰仁城旧事記』『琉球国衣服制度記』『海南諸島单語篇』『沖縄島国頭地方旧慣問答書第一冊』『沖縄島附属伊江島取調書二冊』『沖縄島恩納間切取調書旧慣問答第三冊』『名護間切取調書』『久志地方旧慣問答書第四冊』『沖縄島大宜味地方旧慣問答書第五冊』『沖縄島国頭地方金武間切各村取調問答録第六冊 田代安定輯』『沖縄島中城間切取調問答録第七冊』等、多くの写本がある。なお、田代安定の論文や調査報告等は、当時の『東京人類学雑誌』に掲載されている。一八九五年以降は台湾に移り住む。享年七〇歳。田代の研究成果の一部は、一九四五年に長谷部言人校訂で、『沖縄結縄考』一冊が発行されている。組踊集二冊については、私の方で翻刻して、内容紹介をして、公刊したいと考えている。

さて、この「聟取敵打」は、伊波普猷著『校註琉球戯曲集』の「凡例に」に、「婿入敵討」と記されている。「聟取」が「婿入」となつて表記が異なつてゐるが、内容はおそら

く同一のものと思われる。他の写本類にも見出すことができない。現段階では、この田代安定扣稿本にのみ収録された、めずらしい組踊といえよう。県内の村踊りでは、これまでに演じられた形跡はない。しかし、大正五年五月二七日付の琉球新報の広告を見ると、中座で「婿入敵討」が外題にあるので、上演されたことはまちがいないが、たしかめようがない。

作者や創作年代も現在のところ定かでない。田代が扣稿本(副本)をつくったのが、一八八五年(明治十八)の二度目か、一八八七年(明治二十)の三度目の沖縄調査だと推定しても、これらの年代からそんなにさかのぼらない頃の創作ではなかろうかと思つてゐる。今後、究明されるであろうが、多くの組踊を読み、興味をもつた者が、苦労の末にまとめあげた作品にちがいない。

まず、最初に登場人物を紹介しておく。

- (1) 虎松 南山の分かれの台峯按司の嫡子(若按司)。父(按司)と母(をなぢやら)は、内間赤鬼の火攻めにあい、焼け死ぬ。姉の乙鶴と逃げのびて、父のいとこ玉森按司のところに身をよせて、敵打の機会を待つ。
- (2) 乙鶴 台峯按司の娘。弟(若按司)と共に、火攻めの中をにげのび、玉森按司のところに身をよせる。

(3) 玉森按司　台峯按司のいとこで、若按司・虎松と姉・乙鶴をかくまうが、内間赤鬼が部下を使つて、二人を引き渡すようにいわれる。玉森は、使者を客屋に休ませて、側近を呼び集めて相談する。乙鶴を、をなぢやら(妻)にほしいという内間赤鬼に、儀式をして正式にさしあげたいので、しばらく時間がほしいと、使者に伝えさせる。

配である。乙鶴をわが妻にし、虎松に領地を与えて、独立させる旨を、隠れている玉森按司のもとへ、使者をたてる。

(9) 阿波茶　内間赤鬼の家臣。内間の使者として、根路銘を指名する。

(10) 毛利　内間の家臣。内間赤鬼の家臣。内間の夢見の悪さをなぐさめる。接司の城へ乗り込み、判断をせまる。

(11) 根路銘　内間の家臣。内間赤鬼の家臣。内間の夢見の悪さをなぐさめる。接司の城へ乗り込み、判断をせまる。

(4) 系数の子　玉森按司の家臣。

(5) 崎元大主

玉森按司の家臣。

(6) をなぢやら　玉森按司の妻。赤鬼のたくらみを、周到なる計画であたれば、首を取ることは、まちがいないと乙鶴を励ます。

(7) 間の者兩人(まつあい、三良ひい)　玉森按司の掃除當。明日の内間赤鬼の聟入のお祝いのため、掃除に行

くことを語り、乙鶴と赤鬼の結婚が、ただならぬことを語る。

(8) 内間赤鬼　台峯按司やをなぢやらを火攻めで殺し、台峯の世の主となる。毎日遊びほうけて、何不自由もないが、気がかりなのは台峯按司の若按司虎松と姉乙鶴のことである。二人は、智勇兼揃つて、長刀の秘伝、兵法の奥義をきわめているので、そのままにしては心

の命令で玉森按司のところへついた根路銘は、赤鬼が若接

司を按司の後継者に、乙鶴ををなぢやら（妻）にとりたてたい旨を伝える。玉森は、根路銘等を客屋に休ませ、乙鶴、崎元、をなぢやら等に意見をきく。玉森は、姉弟のとりたてに喜ぶ意を示し、とくに乙鶴ををなぢやらにして下さるなら、正式に送り出したいので、吉田まで待つてくれるよう、使いの根路銘に伝える。根路銘は、もつともなことだと言つて戻る。

第四段は、根路銘、内間赤鬼の出。根路銘は戻り、玉森が御礼式をおこなつて、乙鶴を婦（よめ）に出したいといふことばを報告する。赤鬼は、わが意を得たりと、大いに気をよくする。そして酒宴を催させる。しかし、夕べ見た夢がよくないといい、占ないをさせた。第五段は、間の者（まつあい、三良ひい）の出。まつあいは、乙鶴と内間赤鬼の結婚が、ただごとでないことを語る。

第六段は、乙鶴の出羽。乙鶴、父母の敵打の前に、武芸を披露する。玉森は、乙鶴の技に自信をおぼえる。第七段は、内間赤鬼、玉森の出。内間はお式のため、乙鶴方へ出むく。玉森は、一行を迎えて、にぎにぎしく式をはじめ、酒宴を催す。内間は大いに飲み、酔う。第八段は、敵打。内間赤鬼等が酔つていろいろを、玉森等はとりおさえて、首尾よく討ちとる。

使用されている音楽は、第一段に「さん山ぶし」「子持

ぶし」「長金武ぶし」の三曲。第五段に「早つくたんぶし」、第七段に「かんちやいぶし」「世榮りぶし」「ちるりんぶし」の三曲。第八段に「よしやいなう節」があつて、各場面をもりあげている。

前述したように、大正五年五月二七日に、中座の芝居で役者たちによつて上演されているが、その時は、どの台本を使つたかは、現段階ではわからない。この田代安定扣稿本の他に、台本はあつて、舞台にかかつたのである。その台本が出れば、この写本と比較しておもしろいかも知れぬ。以下、翻刻した台本を紹介する。

虎を乞ひて
身を賣つて
人を殺す者
一
あれは人の手に死んでゆくもの
やまの命は盡るゝに随ての虎
まづ而して爲す様子と云ふ
うあり。且て其威が如故也。而して
之の軍勢も衰えたり。然る
此れを計り。假に虎

居る。と云ふ事だ。
あつた。或ひ火燒死の如く
倒れ。而れに神社の
前。礼拝する風貌と角力士
の如き。又は其の妻の如き
の如き。形相などによつて見
出しえど、實はその嘗て九歩
已往來す處と云ふ。白頭翁の

命たゞよきだ

豈れどもか

かわゆる

あらうかの、みちは

かくと

雪崩の行進

かくと

神之体を知らぬ

かくと

死を知らぬ

ほの時

死を知らぬ

但の事

佛の體を知らぬ

但の事

佛の體を知らぬ

あらうと。まことに高
い木の上に、落葉のあとの枝を
見て、何て落してから落葉だ
かちあるかと思ふ。眞体
は死んで死んだ。死んで死んだ。
死んで死んだ。死んで死んだ。
死んで死んだ。死んで死んだ。
死んで死んだ。死んで死んだ。
死んで死んだ。死んで死んだ。
死んで死んだ。死んで死んだ。
死んで死んだ。死んで死んだ。

聾取敵打

らば、神ミ仏け揃て見守やい給り
此の時ねる 但物ノ音して仏神靈を顯し給つ

虎松乙鶴出羽さん山ぶし

○あさましや式人あたし世に残て哀れ此のうちミムとか
しんき

乙鶴

一 哀れしりみやうりなま出る式人や、南山の分り台峯
の按司の嫡子虎まつ姉乙鶴よ、按司そへが事と去る三
日に、内間赤鬼が悪欲ややまん、抜打の軍火責よや
りば、二所の親や御臣下と共に、城元よ枕やめーと
ないめしやうち、あわれ此の式人焼死のちはやたす、
天の御助に神の引合に、乱軍の中ん兎に角にしのぢ、
こままでや逃てこままでやきやすが便るものはなちけ
ふ三日なれば、心くらやめにないはて、行ん

子持ぶし

○つらさ身受て喰るもの喰はん、歩む道柴の露ともろと
もに、日影け待間の命たらとめば

乙鶴

一 足本んつまで歩てあよまらん、しばしこまなかい休め
ほしやの、あ、たうとー、台峯の御運まだ残て居

乙鶴

一 あ、たうとー、夢とみは実ニ御神顯れて御言葉のあ
もの美すずりのあとて、暫ハしてやりともて休て居て
からや、敵に追付け大事あらんしよもの、急ぎ起立い
急ぎ馳飛い、按司そへが御従玉森の按司便て、時節待
受て敵よ打んでやり、空に物音のあんとみば頓て雲に
飛乗い消て拝まらん、あ、こまに足よとて油断しちか
らや、一大事の沙汰に及はづたいもの、足まろひしち
んつまころび歩で、仰事併に玉森の城に夜昼よかけて
とまいて行ん

道行長金武ぶし

○神の御助に頼も道さとて、おてる露涙ん押払いー、
今と玉森のしるに着る

乙鶴

一 頼も城元やなまと着る片時も急ぎ御取次すらに

内間赤鬼

一 出様来る者や上下んとよも内間赤鬼、舞常の此の世界

や夢の間よやれバ天のばてまてん地の底んくゝて、わ

ぢよしち浮世樂すらんともて、台峯の按司ん命計てか

らに今や台峯の世の主と名乗て、けふや那霸遊び明日

や首里遊び、わが伝に暮ちわが自由に遊て、此の天の

下やわか伝とやすが、壱ツ念願の行つかんあすや、台

峯のなし子嫡子虎まつと娘乙鶴が事ど氣量から姿世界

に立抜て、智勇兼揃て長刀の秘伝、兵法の奥分さとて

居んてやり女身の童子只ならんものよ、あゝ此の女引

取やいわが側になさは、此の世界に思ひ残る事ないら

ん、朝夕此の事と気に係て居たる聞ば嬉しさやあの式

人が事ど玉森の按司便て隠れてる段ん世間取沙汰よけ

ふと我身聞る、あゝわか願の叶て我が願の懸て若か乙

鶴よわか側になしやい、しなさけの御縁重ての先や、

のよて跡反ち我身に弓引る此の上の望やまたとないん

あれは、先づ急ぎ此の事の計よすらに、やあ阿波茶毛

利多津村根路銘の子

阿波茶

一 あゝみしやへる事、是の事やいひん油断しやならん、
やあ根路銘の子、肝要の御使者いやより外に仕立部や
居らん、肝の根よ潜みをかん富り

根路銘

一 あゝ難有さ御受けたやびる、されいかな玉森がやから
るものやてん、言こと葉に応し探廻し、御受しめよ
すや手の内とやゝへる

〔供〕

一 ふう

〔内間赤鬼〕

一 やあ台峯のなし子虎まつと乙鶴が、跡方ん見らん朝夕

此の事に気よしゆたん氣障よしゆたん、聞ば嬉しさや
玉森の按司便て隠りやい居んてしらしへのあればやあ
阿波茶毛利、急ぎ玉森に使者よつかはしやい、先づあ
の按司に向て談合の趣意や、科や按司主人が身の上に
あて、あれば、虎まつが事や按司の跡継ち、取位ん付
て島知行ん吳ゆん、また娘乙鶴やわが側になしやいを
なぢやらに立ておの崇めしよもの引渡ち給ふりてや
り、若しをれこれんならぬをの涯や、直ニ大軍押寄て
からにあとなし子武人引取の上に、按司始め余多御万
人の間切、只並切に切殺ち捨んてやり、使者よ立てた
らばいかによたしやあるか

内間

一 やあ根路銘の子、今的事やれば誇らしやとあよるい、
語らハん先きに合点だうやすが、幾重も返事返答探廻
しぐ、向ふをて付す要目所る

同人
一 御門番衆御取次しやへら

御門番

一 たるがやよら

根路銘

一 あ、みしやる事、先方に応し受返答おの心得しきよて

御腰引ことやいひん御氣支よみせうな

根路銘
一 台峯の世の主内間大主の使根路銘の子が、よしれやい
居る段をんにゆけて給り

按司

一 たう／＼急き打立る用意すれよ

取次

一 御逢よみしやんありにいり召しより

根路銘

一 御礼

根路銘

一 たう／＼御暇よしやへら

但し両方引ク

根路銘

一 たう／＼玉森の城元や今と着る、先づ門番に取次よす
らに

根路銘

一 内間大主の使によしりやい居やべすや、台峯の按司と
氣任しに暮ち、段々の悪行驕りものやとて、島国のみに打ち果ちあすが、嫡子虎まつと娘乙鶴と、按司加那志頼て隠りやい居てやり先づ罪科や按司そへが身の上にあれバ、根葉までん苅てや義理の道立ん、肝苦しやあれば嫡子虎まつや、按司のあと繼ち取位んつけ、島知行んとらちおの素立しよん、また姉乙鶴や、

大主の側に御素立よ召しよちおなぢやらんしよもの急
ぎ此の二人、渡ち給りてやりの使たやへる、若しをれ

これん御にゆきてならんおの涯や、直に大軍責下る積
ん、おの時御乞悔益やまたないらん、あゝやくみさと
あすが先々御思案御返答拝みにやへら

玉森

一 やあ根路銘の子、直に御返答差つまで居もの暫バし客
屋に休そくよされ、

一 やあ乙鶴よ、赤鬼が使にいやと虎まつがこまに逃忍て
隠れやい居る段、委細聞及て引渡すてやり、慈悲の道
勝て談合の趣意や、虎まつか事や按司そへか跡継ち、
取位ん付て島知行ん吳ん、いや、赤鬼か側になちをち
や（ら）んしよんてやり、また引渡す事のならんどん
あらは、大軍下さゝんしよもの、よしあしの返答すら
てやり、欲惡の内間から使のつちをすか、いつれ肝つ
くち考えて見りよ

根路銘

一 拝ん留やて

乙鶴

一 やあ按司加那志、わすた身の故に美をんぢよの企に、
御難儀よ掛よすや道ならんあもの、とてん手に渡て打
死よすらば、美おんぢよの企にさひんないんあれば、
たう／＼御暇よしやへらよろち給り

玉森

一 やあ崎元の大主、内間からの使只ならん事よ、虎まつ
と乙鶴急ぎ呼よ

玉森

一 やあ乙鶴よ、事急ぎするな事荒くするな、克々思案題

目やあらに

崎元

一 御礼

崎元

一 やあ思ないの前よ、打死よてすんちやんならん道よ、

得と肝いして、御思案第一やあやびらに

乙鶴

一 やあ按司加那志、なまの御事のある事や我身の、兼て
からいひんしらんあやへたん、あ、御恩たうとさや美

拝とすてやひら

玉森

一 い、是に思付る事のまたあしや、色欲の赤鬼今的事あ
れば、先つ虎まつと乙鶴や、引よ渡しよする引よ取ら
しゆすか、乙鶴か事とおなちやらにされる仰事てやり
直に引渡ちおなぢやらにてや義理の道立ん、面目う
んないらん恥ならんしよもの先つ媒を立ておれーの
礼式、結構にしちゆて婦よ送よすと、ひとの道さらめ
人の道たいもの、よかる日よ選てまさる日よ選て、も
く入の段使よ上げよもの、此様大主に美をんによきて
呉りてやり、返言よしちよて心よるこばち、心をて付
て聟入の式に、計事廻らしやい四方から囲て、生取よ
さんしゆすか此の計り事やちやかやよら

おなちやら

一 やあ乙鶴よいかな赤鬼か巧ミンざやてん、なまの御事
に洩やまたならん、首よ打取す疑やないらん、いひん
この事に気支するな

玉森

一 やあ乙鶴よ、細々の談合や先つあとの事、たうー内
にいようり

同人

一 やあ供のちや、内間からの使へ急ぎ呼よ

供

一 拝ん留やびて

崎元

一 あ、今の御計や人の及はらん、いかな赤鬼が器量勇力
の、人勝りやてんあれや一方に、色欲に迷てこまの百
巧ミ、たくて居る事や夢程んしらん、青縄の内に首よ
入よすや、語らはん先に合点とや、べいる、あ、誠台
嶺の御連さらめ

玉森

一 やあ根路銘の子、大主の仰す御慈悲御情や、虎まつと
乙鶴ん難有さしち居れば、直に手に渡ち送る筈やすが、
乙鶴が事とおなちやらんされる仰す事やれば直にうし

やけてや、義理の道立んないんあれば、先つ媒を立て

をりこれの礼しち、結構にしちよて婦よ送よすと、人

の道さらめひとの道たいもの、よかる日よ選て勝る日

よ選て、聟入の段此月の内に、使よ上けよもの此の様

大主にお返事されり

根路銘

一 あゝなまの仰事御尤至極、御互の御果報よい事たや
びる

玉森

一 やあ根路銘の子、是れ〳〵書翰上で給り

根路銘

一 先づ御暇よしやびら

玉森

一 宜敷御取成し御願とやたる

根路銘

一 され〳〵根路銘の子なまと行来へる

赤鬼

根路銘

一 やあ大主、玉森の按司と御威勢に恐れ、平に降伏仰す
事体に、口のない事に御受しち居すが、此にまた壱ツ
願のあやびすや、御慈悲御情の仰事やれば、直に引烈
れておかむ筈ですが、婚礼や人道おひいものやは媒
を立ており〳〵御礼式おこなての上に婦よ送すと、義
理の道たいもの人の道やれば、先つ此の月の内によか
る日よ選て、聟入よしよんてやりのご返答たやへる、
是れ〳〵御書翰だやへる

赤鬼

一 あゝしたり〳〵、願事叶て思た事懸て、なまからの先
や高枕すけて、楽に樂重ね、暮す留ば、やあ〳〵けふ
ふこらしや、物にたとられミ、内に入り互に祝ひ遊ば

内間

根路銘

一 みせる事けふや御祝しやへら

一 今と行来るい、待兼て居たん

一 やあ〜阿波茶毛利多津村根路銘の子出様れ〜

同人

一 やあ〜玉森の使に明日のよかる日に、聟入よしゆん
てやりの手紙来て居すが、兼てからの手組差支やない
らに

毛利

一 あゝ此やよい事たやへる、おれ〜の御手組差支やな
ひやへらん

内間

一 やあ〜、よい事や目の前引寄てをすが、夕見ちやる
夢に加籠の鳥やすか、加籠をかき破てわ身に飛ひ懸て、
きがよしよんてやり醒て今迄ん、胸さゝよあれば気障
よしち居ん得と肝居て占なやい見りよ

多津村

一 され夢や空なしもの筋替なでど、様々の夢ん美見かけ
やへる御氣支の事やいひんあやへらん

間の者兩人

一 此の式人や、御掃除當とやすが、明日内間大主聟入の
御祝儀のあて御御掃除の勤み仰すされて御通り筋草払
に行ん

まつあい

一 はい言る内はちちやい、是れから是れんかい急ぎ始め
らう

三良

一 あんさう

兩人

一 さつさ

但ひら草踊する

早つくたんぶし

○御祝ひすて事二なんと働らちんいひんいとゝやびめあ
すやはてん

三良ひい

一 はいまつあひい、くわちいの事おもらい仕口んしよる
事なんいらん、只一氣張に目見せうん仕取て、はあ、

ていはどくせ、先つあす入やがな多葉粉つけらう

まつ

一 いやい三良ひい、此の御聟入やふんの御もく入むてと
おもたうるい

三良

一 のかまつあひい、聟入に替る事のあみ、御玄館からい
よすと、上御中門からいよすとの替とやるい、

まつ

一 あは（）ハおかしものどやる、いや、もつとし
らんあたみたう話ハ聞け、あの御聟てすや、御主人の

御従、台峯の按司の大敵内間赤鬼どやる、此の赤鬼

まつ

一 あ、是事や、そつとんしらんたさあいや三良あひいこ
ちに犯ち、おの上にこぞの三月にや、台嶺の城に軍押
寄せて、火バあ（）く付て、御城焼崩、按司んおな
ぢやらん御万人んともにかいはうかつて、はあ（）痛
しい事、やすが、御娘乙鶴ど若按司虎まつ抱ち逃忍て
御主人の所に隠りていまいる段聞付て、二所戸渡ち給
り（）なんどんせへ虎まつや按司の跡継ち、取位ん付

て島知行ん吳よん、また乙鶴やうり程のよひかあけ芙蓉の色遠山の眉柳の腰ひたいくいたいしどんちや打向る方、島国んなひく丈の人やて、あつたあがあちよん、ちやんないやさんかんて此の事思らい、ちやかな恋しくなよさあやて乙鶴や側になち、おなちやらんされんでんち、使の来んだあ、御主のごたうる、もの考の深さる人の此れやありがたい事やすが、直におしやけてや、節義の立んこと何日御にびち日選の段、使へ上げて御礼式事御済の上におなちやらになしゆんていちやん、だあ色欲の赤鬼やにいびちの事ばかいとおもたる、抜打の事やそつとん知ん、やかて打殺さりうんておもらい、人の上んてん思いらん、肝くれしややとうつさる

まつ

三良
一 あんさうや

乙鶴

て手事にて手並ある

乙鶴は令旗を以指令する事

一 我身や台峯のなし子乙鶴よ、悪欲な内間こまに釣寄て、
拔打に討る御計よやすが、此様敵打に我身おくやて

ん、よその手に借てやへならんあとて太刀や長刀に鎧
り鎧の外に数々の武芸戦の秘伝我か側の者に委細こま
に、習わしやいあもの指南しち置ん、急ぎ此の事

やあたにおんにゆけて御直御見分めしよらちの上に美
よんちこと受て、美よんちもひて敵よ討取よる計よす

らに
但此時内に入る

玉森

一 やあ乙鶴よ、おなく身の習の嗜なたる手並、急ぎ振立
よ見ふしやあもの

乙鶴

一 やあ接司添前、待兼る月日明日が日になどんやくめさ

よあてん美よんにゆかて給り、親の敵打や御手からん
事に、我身に引受て討よとやへらに先つ指南しち置る

手並御見かけら

但此の時乙鶴内に入り女生四人長刀を持ち乙鶴ハ右
之手に令旗を持ち左の手に太刀を提げ留太鼓にて出

玉森

一 あ、寄妙～おなご身の習のなまの嗜やむかしからな
まに沙汰ん聞ん敵よ討取よす疑やなひらん

供申

一 あ、御指南の程関心たやへる

玉森

一 たう～内に入り互に手組すれよ

供申

一 拝ん留やびて

供申

一 され御出立御時分たやびる

内間

一 さあ～急が～

道行かんちやいふし

○けふのよかる日や天気晴渡て、押風んすたしや野山石
原ん、只足に任ち頼も玉森に、肝急ぎ歩てなまとつき
やる

供

一 され〜玉森の城に着へたん、あり〜御目懸り美御
向へたやへる

但此の時女生兩人木馬のた繩を取り若衆兩人大鼓を
打ち男壺人傘を差し迎に出ル皆ミだう〜の声を呼
べ候而内に入ル左候而聾ハ梯懸り亭主ハ左の出口の
双方より出座に烈り

内間

一 やあ按司添前、願た事供に美にゆかい召よち、あ、難
有さ美拝たやへる

玉森

一 やあ大主なまらの先や御縁引やはれは、互に肝合ち、
いち足ん事や壺人足い〜互いに補のとて浮世渡す
と道やあやびらに

内間

同人

一 やあ〜急ぎ御式始りよ

世榮りぶし

○けふのよかる日に御式はしめとて、明日の勝る日やよ
くの御祝はい

但此時若衆壺人瓶取同壺人御台直しニ而御酌の取替
ある

玉森

一 やあ阿波茶毛利、けふからの先や御氣支んないらん余
り大屈大粧よたるものやあ崎元の大主ありにんぢうが
達ん壺ツ呑い遊び

阿波茶毛利

一 今的事やは誇らしやとあゆる、やあ按司添前、世間
豊めかそ此の内間上や飛鳥ん打向かる方や島国んなひ
く勢またたいもの今からの先や御氣支んないらん、樂
んらく選て夢の間の浮世、心安す〜と遊びしやべら

玉森

一 あ、此の上の嬉しや御互の御果報とやよる

一 拝ん留やひて

り／＼

内間

一 いゝ氣支んするな快か呑い遊び

ちるれんふし

○浮世とよみれす赤鬼よやてん加籠の鳥こころ飛のな

よめ

崎元

一 あれにんぢ御祝しやへら

内間赤鬼

玉森

一 やあ／＼童子のきや御酌取て揚り

一 あ、美さ／＼またん呑ん

内間

一 たう／＼近く寄り

阿波茶

一 あ、一大事な事、され／＼時分たやへる御戻よ召より

内間

女兩人

一 やくみさよあてん壱ツ揚けやへら

一 いや／＼かもらん／＼遊び／＼

内間

一 あ、常やどく呑ん我身とまたやすが、けふのふくらし
や壱ツのまに

□

一 やあ／＼さまだけやあらに

但此の時手にて押へ帰し央にて打殺す

内間

一 いい童子酌取の美さなれふちんよたしや、たう／＼踊

乙鶴

一 いや逃がさん

内間

一 やあ、一大事な事へ、いきやしちやる事が

ものにたとらん、ゑいいやか孝心の深さある故に
誠観音の御助とやよる

玉森

一 やあへ内に居るもの出様り

崎本

一 あ、召しやる事、あすへ敵打よ取召しよち、扱て
く御果報よい事たやへる

乙鶴

一 やあへ悪欲なやからけふや思しよめ

内間

一 あ、偽の巧め夢程んしらんたうへかゝよらばかゝり

切殺ちとらさ

但此の時乙鶴長刀を提げ立向へ余の人ハ太刀提げ助

立しごと内間兩人捨余合戦候處内間手弱くなり舞台

にて切り殺さる

乙鶴

一 たうへけふの誇らしや物にたとられめ、内にんぢ踊
り羽ね御祝すらに

よしやいなう節

○かた(ち) 打取たるけふの誇らしやや過し一所ん嬉
しやみせへら

乙鶴

一 やあ按司そへ前御計の事に敵打済ち過し式所ん嬉
しや召ら

玉森

一 やあ乙鶴よ朝夕忘りらん敵ん討済ちけふの誇らしや、